

II 調 査 法

多くの沼地を含むなだらかな起伏に富んだ武蔵丘陵森林公園の、土地利用計画の基礎としての植生調査は1969年、1970年の2カ年にわたって以下の手順によって行なわれた。現地調査は室内作業による植生調査資料の整理、植生図化作業と平行しながら、数度にわたって集中的に行なわれた。

1) 植 生 調 査

比較的自然植生に近い植分から、人間の影響によって変えられた二次林や植林、または水田や耕地雑草群落にいたる対象地域の全ての植分をもうらすために全地域をくまなく踏査し現地における植生調査 (Vegetationsaufnahme) が行なわれた。参考資料として対象地域外の類似の植分についても若干の植生調査が合わせて行なわれた。個々の植分調査に際しては調査区内の全出現種について高木第一層 (Baumschicht-1)、高木第二層 (Baumschicht-2)、低木層 (Strauchschicht)、草本層 (Krautschicht) の各階層別に完全な種のリストを作製し、次いで各層の出現種について Braun-Blanquet (1964) の被度と群度による優占度の総合判定法により量的測度が与えられた。植生調査の一例は Tab. 1 にあらわされている。

植生調査資料は室内での群落組成表の組み替え作業をくり返しなが、あわせて今までの他地域での調査資料と比較検討しながら群落単位の決定が行なわれた。

Tab. 1 Ein Beispiel der Vegetationsaufnahme

植生調査の一例

Name d. Gesellsch. 群落名: クヌギーコナラ群集、オオバギボウシ亜群集

Subass. von *Hosta montana* des *Quercetum acutissimoserratae*

Aufn. Nr.: 調査番号 MH-91 Dat.: 調査月日 '70.6.28

Aufn. von: 調査者 A. M, K. F, u. Y. S.

Baumschicht-1 高木第一層 11m 70%

Baumschicht-2 高木第二層 5m 40%

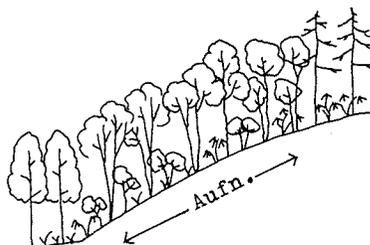
Strauchschicht 低木層 2m 20%

Krautschicht 草本層 0.5m 40m

Exp. u. Neigung: 方位、傾斜 N5°

Größe d. Probestfläche: 調査面積 15×20qm

Artenzahl: 出現種数 49spp.



B ₁		K	+ ネムノキ
4.4	コナラ	2.2	ヤマツツジ
2.1	ヤマザクラ	2.2	チゴユリ
+	アオハダ	1.2	ヒメカンスゲ
+	フジ	1.2	タガネソウ
B ₂		1.2	コウヤボウキ
3.3	アオハダ	1.2	ホソバヒカゲスゲ
1.1	イヌシデ	+ .2	レンゲツツジ
1.1	ネジキ	+ .2	ノガリヤス
+	コナラ	+	オオバギボウシ
S		+	フジ
2.2	ナツハゼ	+	エゴノキ
1.2	アオハダ	+	サルトリイバラ
1.2	ヤマツツジ	+	ヘクソカズラ
1.2	フジ	+	クリ
1.2	ネジキ	+	シラヤマギク
1.2	アズマネザサ	+	ヤマコウバン
+	トコロ	+	ヤマウルシ
+	サルトリイバラ	+	ナツハゼ
+	エゴノキ	+	エビヅル
+	リョウブ	+	スギ ki.*
+	イヌシデ	+	アオハダ
+	ハリギリ	+	ヤマホトトギス
+	ガマズミ	+	オケラ
+	カマツカ	+	ヒヨドリバナ
+	ムラサキシキブ	+	クサボケ

* ki : 芽生え

2) 現存植生図の作製

植生調査結果による具体的な群落単位と、実際的で利用されやすい点を考慮して優占種等による相観をも加味した現存植生図 (Karte der realen Vegetation, 縮尺 1 : 5,000) の作製が行なわれた。現存植生図作製は植生調査によって得られた具体的な群落単位にもとづいて現地踏査により各植生の配分を把握し地図上に記録、また各群落の具体的なひろがりを検討する際には航空写真が参考とされた。

3) 潜在自然植生図の作製

植生調査資料と現存植生図からできるだけ自然植生に近い群落の群落組成表を集めて検討された。次いで隣接地域や他地域の類似群落の植生調査資料と比較検討して、潜在自然植生図 (Karte der heutigen potentiell natürlichen Vegetation) 作製の指針とした。とくに周辺に見られる社寺林、古い農家の屋敷林などの自然植生の残存林分や残存木にも注目し、さらに調査対象地内の二次林や植林地の林内に生育する潜在自然植生の構成種がてがかりと

された。また植生の生育を支配し各植物群落の生育域を規定する要因は気候・地下水及び水分条件・土壌・微地形等による多様な環境条件の総合されたものと考えられる。したがって、畑や水田・植林・薪炭林などの土地利用の形態や農家の配置なども、それらの総合的要因に対応する潜在自然植生や立地のちがいにあった利用配置が行なわれていると考えられる。したがって潜在自然植生の群落単位決定や具体的な配分については、以上のいろいろの調査資料を加えて総合的に判定された。